

善光寺創建説話と請観音経

ヴァイシャーリー治病説話を中心に

倉田 治夫

キーワード：善光寺 縁起 請観音経 創建説話 疫病

はじめに

善光寺は、治承3年(1179)の焼亡¹の後、文治3年(1187)に源頼朝が「靈験殊勝伽藍也」として目代・御家人等に再建への合力を命じた²のを契機に注目を集め、後に「三国一之靈場、生身弥陀浄土」³と称される程の隆盛を見て、今日に至っている。「生身弥陀」とは善光寺本尊の阿弥陀如来を指すが、脇侍に観音菩薩と勢至菩薩を伴い、独特の形式を持った一光三尊の立像であり、特に「善光寺如来」と呼ばれる(小林2000)。

善光寺の草創事情を記す書物の内、室町時代成立と見られ、江戸時代の諸本にも影響を与えた真名本『善光寺縁起』巻一に次のように記されている⁴。

当_レ此時分_ニ。釈迦如来於_テ東天竺毘舍離国[菴]羅樹園大林精舎_ニ。説_ク請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経_ヲ⁷。此経即明_ニ⁷善光寺、生身如来娑婆応現之由_也。(5丁裏)

釈尊が毘舍離国(ヴァイシャーリー)滞在の折に説いた『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』(大正蔵20, pp. 34c-38a。『請観音経』と略称)が、善光寺の生身如来出現の由来を示しているという。密教系の観音経典としては最も早期に成立したもので(佐和1977)、『開元釈教録』(大正蔵55, p. 509a)は、東晋恭帝の元熙元年(419)、西域出身の竺難提訳と伝える。

日本においては、まず『正倉院写経文書』(大日本古文書、編年部7ノ69)に天平9年(737)書写の記載があり、前年9月から玄昉将来本を主な原本として始まった一切経書写の中に含まれる(速水1970)。長元3年(1030)には、前年から蔓延した疫疾への対策として『請観音経』の図写供養が求められており⁵、院政期には除病抜苦のための『請観音経』読経がしばしば記録されている⁶。後述『阿婆縛抄』によれば、修法としての請観音法(楊枝浄水法)は保元元年(1156)に流行した疫病の難を払うために修したのが初例である。

『善光寺縁起』についての多くの先行研究の内、倉田(1991)、吉原(1998)、小林(1996, 98, 99, 2000)等が詳細に『請観音経』との関係を論じている。しかし、「生身弥陀浄土」と呼ばれるような阿弥陀信仰の靈場寺院でありながら、その創建説話において「浄土三部経」等の有力な浄土経典や他の観音経典ではなく、『請観音経』が重んじられているのは何故なのか。そして、『善光寺縁起』

諸本の善光寺創建説話の中にどのように組み込まれているのか。これらについての見解は未だ管見に及んでいない。小稿では、倉田（1991, 2001, 2003）における書誌学的検討をもとに、江戸初期までの『善光寺縁起』諸本から善光寺創建説話の根幹をなすヴァイシャーリー治病説話に相当する部分を抽出して考察を試み、善光寺信仰を理解するための一つの手がかりを得たいと考える。

1 善光寺創建説話

現存の『善光寺縁起』は、ほとんどが中世以降に作られたものである。その内、最古層に属するのは院政期の作とされる『扶桑略記』所引「善光寺縁記」と、成立年代そのものについて議論がある十卷本『伊呂波字類抄』中の記述である。ここでは、まず坂井（1969）及び米山（1957）が『伊呂波字類抄』記事を「奈良縁起」、『扶桑略記』所引「善光寺縁記」を「平安縁起」と呼ぶ、その順で内容を確認しておきたい。

(1) 十卷本『伊呂波字類抄』（大東急記念文庫蔵本）⁷

『請観音経』の受容という観点からは外れるが、創建に関わる記述がある。

期仏像、日本国度至経歳積、并二百拾陸歳之中、京底流転年数五十歳、信濃国請降、経年員一百六十六歳仏々々、推古天皇十年^{壬戌}四月八日、信濃国人若麻統東人上洛、下向日奉伝此仏、自負而下、時京大和国之高市郡小治田宮、路次宿々、敢不離背、国々司々、聞此歳彼、每宿免田、下着本国麻統村、造寺奉居、四十一ノ礼拝供養、曠極天皇元年^{壬寅}、時京大和国高市郡明香川原宮、長老東人水内宅庇奉渡此仏、即作草堂号本善堂是也、奉居既畢、夙奉見、仏不見給、驚而還家宅、儼然在庇、万人流涙、随喜靈驗、其、改宅作寺、善光寺是也。

年代を特定できる手がかりが明記されている。善光寺の仏像が信濃国に降ったのは推古10年（602）。それを起点として50年遡らせると552年、即ち欽明13年。『日本書紀』にいう仏教公伝の年にあたり、百濟の聖明王が贈ってきた日本初伝の仏像ということになる。「京底」に50年間「流転」し、「信濃国」に降ってから166年。公伝の年からは216年経過しているとして、坂井（1969）は神護景雲2年（768）に存在した縁起と位置づけて「奈良縁起」と呼ぶ。米山（1957）は稿本段階の坂井（1969）を活用して、自らの神護景雲2年説を展開した。

これに対し、十卷本『伊呂波字類抄』は、二卷本、三卷本（色葉字類抄）からの増補とする見方があり、十卷本以外に見られない善光寺記事も後世の増補であるとして、「奈良縁起」と呼ぶのに懐疑的な見解もある（倉田1991、牛山1997）。ところが、峰岸（1984）など『伊呂波字類抄』の国語学的研究が進展する中で、十卷本を増補でなく別系統とする研究成果が出されている。それをもとに、田島（2000, 2005）は神護景雲2年時点で善光寺草創に関する情報が信濃から都に伝わるような機会があれば奈良時代のものと認めてよいと考え、その情報を伝えた者として濃宜水通という人物を導き出している。

人物についての検証は小稿の目的から外れるので他日を期することとし、田島(2005)の解釈を基準に『伊呂波字類抄』の内容を以下に確認すると、

信濃国人の若麻績東人が推古天皇10年にこの仏像を背負って信濃国に下向し、路次の途中の宿々でも仏像を背中から離さなかった。東人は一旦、麻績村に「寺」を造って仏像を安置したが、推古天皇10年から数えて41回の礼拝供養を経た皇極天皇元年、「水内宅」の庇部分に仏像を安置し、更に草堂（「本善堂」と呼ぶ）を造ってそこに仏像を移したところ、翌朝、水内宅の庇部分に戻っていたという「不思議」があった。そこで「宅」を改めて「寺」に造りかえた。これが「善光寺」である。

この中で、『伊呂波字類抄』が如何なる文献を見ていたのか、現在のところ不明であり、『請観音経』を取り入れた痕跡も見当たらない。

(2) 『扶桑略記』（真福寺本）⁸

『善光寺縁起』という書名の初出は、現在のところ『扶桑略記』欽明天皇十三年条に「善光縁記云」として引用される一文である。『扶桑略記』撰者については、堀越(1984, 1985)始め皇円(1074?-1169)撰に否定的な研究が多いが、院政期の成立という点では一致している。(①～④は便宜のため私に付加)

①十三年壬冬十月十三日。百濟国聖明王始献_レ金銅釈迦仏一像。并経論幡蓋等_レ。其表云。是法於_レ諸法中_レ最為_レ殊勝_レ。難_レ解難_レ入。周公孔子。尚不_レ能_レ知。(中略)

②一云。同年壬申十月百濟明王献_レ阿弥陀仏像。長一尺五寸。観音勢至像。長一尺_レ。表云。臣聞。万法之中。仏法最善。世間之道。仏法最上。天皇陛下亦応_レ修行_レ。故敬捧_レ仏像経教法師_レ。附_レ使貢獻。宜_レ信行_レ者。已上。

③或記云。信濃国善光寺阿弥陀仏像。則此仏也。少治田天皇御時。壬辰年四月八日。令_下秦巨勢大夫_レ奉_上請_レ送信乃国_レ云々。

④善光寺縁記云。天国排開広庭天皇治十三年壬十月十三日。從_レ百濟国_レ。阿弥陀三尊浮_レ浪来。着_レ日本国摂津国難波津_レ。其後經_レ卅七ケ年_レ。始知_レ有_レ仏法_レ。仍以_レ此三体_レ。為_レ仏像之最初_レ。故俗人号_レ之。悉曰_レ本師如来_レ。小墾田推古天皇十年壬四月八日。依_レ仏之託宣_レ。忽下_レ綸言_レ。奉_レ移_レ信乃国水内郡_レ。仏像最初。靈驗揭焉。件仏像者。尤是釈尊在世之時。毘沙離国月蓋長者。隨_レ釈尊教_レ。正向_レ西方_レ。遥致_レ礼拝_レ。一心持_レ念弥陀如来。観音。勢至_レ。爾_レ時三尊促_レ身於一揲手半_レ。現_レ住月蓋門闥_レ。長者面見_レ一仏二菩薩_レ。忽以_レ金銅_レ所_レ奉_レ鑄写_レ之仏菩薩像也。月蓋長者遷化之後。仏像騰_レ空。飛_レ到百濟国_レ。已經_レ一千余年_レ。其後浮_レ来本朝_レ。今善光寺三尊。是其仏像也。已上出彼寺本縁起之文。

①は百濟の聖明王が金銅釈迦如来像一体と経論・幡蓋等を献じたという内容の仏教公伝記事である。『日本書紀』欽明天皇十三年条をほとんどそのまま収録し、『日本書紀』にない「十三日」を付加している。

②は異説として提示され、献上仏を阿弥陀三尊像としてその寸法を阿弥陀像一尺五寸、観音・勢至一尺とするが、④では「一揲手半⁹」となっている。

③の「即此仏也」は、②で示した仏教公伝の際の献上仏を阿弥陀三尊とする異説を受けて、それが善光寺本尊に他ならないとする。

「少治田天皇」は小墾田天皇、即ち推古10年4月8日に信濃国に送ったこと、その任に当たった人物として秦巨勢大夫を明記する。本人が直接運んだのでないことは真名本『善光寺縁起』に明確にされており、

即以_レ巨勢太夫_レ被_レ下_レ詔命_レ。時仁王三十四代推古天皇御宇願転二年壬戌四月八日、善光自奉_レ負_レ如来_レ下_レ向信濃国_レ。

とある(倉田2001, p. 299)。「巨勢太夫」なる人物は詔を伝え、阿弥陀仏は「善光」が背負って信濃に下ったという。一般に「善光寺」という名称の由来になったとされる「善光」即ち「本田善光」は『扶桑略記』には登場しない。

④は五段構成。アの部分を見ると、年月日は①と共通。聖明王献上仏ではなく、阿弥陀三尊が百済から浪に浮かんで来たとする点が異なる。重量のある「金銅仏」が浪に浮かぶ訳もなく、難波津に漂着したとしても百済から流れてきたと知る由もない。海の彼方、即ち百済由来という伝承を伴った仏像であることを強調している、説話上の譬喩と考えたい。『日本書紀』欽明天皇十四年五月朔条の吉野寺放光仏と同様の霊像・霊木漂着伝承の一種となっている。

三尊像は「仏像之最初」であり、人々は「本師如来」と呼んだという。阿弥陀如来を「本師如来」と呼ぶ例は『不空羼索呪経』(大正蔵20, p. 400b)に「我今頂礼本師阿弥陀如来」、『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』(大正蔵20, p. 1151c)に「念我之名字亦应専念我本師阿弥陀如来」とある等である。

ウは、仏が自らの意志で信濃国水内郡に遷ったとする。「生身の仏」という表現は「善光寺縁起」の中に見当たらない。しかし、「託宣」するのであれば、「生身」とする伝承が生まれるのは容易である。『水鏡』¹⁰には、

彼生身ノ善光寺ノ阿弥陀ノ三尊ヲバ大和国高市ノ郡ノ難波ノ江ニシズメ奉リ。

とあり、作者が中山忠親(1132~1195)とすれば、院政期にそのような伝承が存在している可能性は認めてよいであろう。

①から④まで通読すると、正史の記述を示した後、一云→或云→善光寺縁起云とつないでいる点は辻褄が合い過ぎていて作為臭があり、全体が創作ではないかという印象も拭えない。しかし、田中(1992)を参考に『扶桑略記』を見ていくと、注記部分に詳細な記述があるのに気づく。④の場合、「善光寺縁起云」で始まり「已上出彼寺縁起文」と締めくくっているのは引用であることを明確に表明している。次に、平田(1956)を踏まえて他書引用について見ていくと、欽明天皇三十二年同比条に八幡大明神の出現を扱う中で「一云……已上出彼縁起文」とある。天武十三年条には「已上在大安寺記」とあり、天平六年条には「已上出彼寺縁起」として実名をあげないものの『興福寺縁起』を引いている。簡単に創作と決めつけることはできない。『扶桑略記』の編者は、当時実在していた縁起あるいは古記録を実際に見ており、引用にあたって一定の意図、即ち『日本書紀』の記述は認めた上で初伝の仏=阿弥陀仏=善光寺本尊という流れを作ろうとする意図を持っていたものと考えたい。

披見の真福寺本には「縁起」とある。中野(1995)によれば、草創説話は

本来「縁記」＝「コトノモトヲシルス」であり、「縁起」は「縁記」と同音で類似の意義から草創説話の名称に使用されたという¹¹。梁の僧祐著『釈迦譜』（大正蔵 50, p. 52a）巻二に「釈迦従弟調達出家縁記」等、巻三には「釈迦竹園精舎縁記」「釈迦髮爪塔縁記」等の章名が見られる。『出三蔵記集』（大正蔵 55, p. 1b）の冒頭は「集三蔵縁記第一」とあり、同書自体の編纂と經典成立の因縁が説かれる。

2 「善光寺縁記」における『請観音経』の受容

ここで、『扶桑略記』所引「善光寺縁記」④エを再掲、検討していきたい。

件仏像者。尤是釈尊在世之時。毘沙離国月蓋長者。随_レ釈尊教_レ。正向_レ西方_レ。遥致_レ礼拝_レ。一心持_レ念弥陀如来。観音。勢至_レ。爾_レ時三尊促_レ身於一搦手半_レ。現_レ住月蓋門闥_レ。長者面見_レ一仏二菩薩_レ。忽以_レ金銅_レ所_レ奉_レ鑄写_レ之仏菩薩像也。

月蓋長者が釈尊の教えに従って西方に向かって阿弥陀三尊を一心に持念したところ、一搦手半に縮めて門闥に現れたのを目の当たりにし、鑄写したという。上述のとおり真名本には『請観音経』が三尊の出現を説いているとあるが、月蓋は『維摩経』¹²『観薬王薬上二菩薩経』（大正蔵 20, p. 660c）にも登場する。しかし、両書を「善光寺創建説話」の組み立てに使った形跡は見られない。月蓋については倉田（1991）で扱っているので小稿では省略する。なお、近年発見の『維摩経』サンスクリット写本¹³により、月蓋の原語がソーマチャットラ（Somachattrā）であることが確認できる。

大塚（2008）によれば『請観音経』は次の4つのストーリーから成る。

- I ヴァイシャーリー治病説話
- II 観音菩薩の称名と呪文誦持による功德と諸難救済
- III 六字神呪の功德
- IV ウパセーナ比丘説話

この内、善光寺の創建説話の中に取り入れられているのはIの部分である。以下に、『請観音経』の記述を確認しつつ、④エと比較しておきたい。

『請観音経』（大正蔵 20, p. 34b）

如_レ是我聞、一時仏住_レ毘舍離国菴羅樹園大林精舎重閣講堂_レ。（中略）

爾_レ時毘舍離国一切人民遇_レ大悪病_レ。（中略）時毘舍離大城之中、有_レ長者_レ、名曰_レ月蓋_レ。与_レ其同類五百長者_レ俱詣_レ仏所_レ。

冒頭、ヴァイシャーリーに疫病が蔓延し、月蓋長者が釈尊を訪ねて救済を懇願するとして話がスタートする。滞在の場所は遊女菴羅女（アームラ・パーリー）所有のマンゴー園。ここが経の説所である。なお、④エには疫病の話は出てこない。

『請観音経』（p. 34c）

爾、時世尊告長者言、去此不遠、正主西方、有仏世尊、名無量壽。彼有菩薩、名觀世音及大勢至。恒以大悲、憐一切、救濟苦厄。汝今应当五体投地、向彼作礼、燒香散華、繫念數息、令心不散。經十念頃、為衆生故、當請彼仏及二菩薩。説是語時、於仏光中、得見西方無量壽仏并二菩薩。如來神力仏及菩薩俱到此国、往毘舍離、住城門闔。仏二菩薩与諸大衆、放大光明。照毘舍離、皆作金色。爾時毘舍離人、即具楊枝浄水。授与觀世音菩薩。

釈尊が「作礼」「燒香散華」「繫念數息」等を勧める内容である。④エでは凝縮して「遙致礼拝。一心持念弥陀如來。觀音。勢至。」の一言でまとめている。釈尊が説いている間に仏光中に觀音・勢至の二菩薩を従えた無量壽仏、即ち阿弥陀仏が見え、釈尊の威神力によってヴァイシャーリーの門闔に出現したという描写である。門闔の闔はしきみ。三尊仏は出現するや直ちに光明を放って国中を金色に照らしたという。人々が觀音菩薩に楊枝浄水を献じたとあるが、④エにそのくだりはない。

『請觀音經』(p. 34c)

大悲觀世音、憐愍救護一切衆生故、而説呪曰、普教一切衆生、而作是言、汝等今者应当一心称、南無仏、南無法、南無僧、南無觀世音菩薩摩訶薩、大悲大名称救護苦厄者。如此三称三宝。三称觀世音菩薩名。燒衆名香、五体投地。向於西方、一心一意令氣息定。為免苦厄、請觀世音。合十指掌、而説偈言

願救我苦厄 大悲覆一切 普放浄光明 滅除癡暗冥
 為免殺害苦 煩惱及衆病 必來至我所 施我大安樂
 我今稽首礼 聞名救厄者 我今自歸依 世間慈悲父
 唯願必定來 免我三毒苦 施我今世樂 及与大涅槃

白仏言、世尊、如是神呪必定吉祥。乃是過去現在未來十方諸仏大慈大悲陀羅尼印。聞此呪者衆苦永尽、常得安樂、遠離八難。得念仏定現前見仏。我今當説十方諸仏救護衆生神呪。

釈尊の説所に阿弥陀三尊が現れて觀音が人々のために呪を説くという話を軸に、三宝と觀音を一心に称えるというパターンが繰り返される。脇侍としての出現ではあるが、主役はあくまでも觀音である。

「願救我苦厄」以下は4偈から成る祈願偈。第1～第3偈は、人々が觀音に対して苦厄を救い、大悲を垂れて癡暗を除くこと、殺害苦、煩惱、病氣から免れ、安樂を与えられること等、現世的利益を願う内容である。最後の偈は三毒苦を免れ「今世樂」と「大涅槃」を願っている。現世利益に次いで出世間的な利益も祈願する筋立てになっているのである。

以上のくだりは後述諸本にも取られているが、④エには見られない。

『請觀音經』(p. 35a)

多耶咄 嗚呼膩 名好喉鬼 摸呼膩 (中略) 白仏言、世尊、如此神呪。

乃是十方三世無量諸仏之所宣説、誦持此呪者。常為諸仏諸大菩薩之所護持、免離怖畏刀杖毒害。及与疾病令得無患。説是語時毘舍離人平復如本。

「多耶吽 嗚呼膩 名好喉鬼 摸呼膩」と続く呪は、唱えることで諸仏菩薩に守られ、「怖畏・刀杖・毒害・疾病」による恐れから逃れられると説く。「是語」とあるが、文脈からして呪を唱えることであろう。それでヴァイシャーリーの人々は本のように治ったという。④エには見られない。

3 『善光寺縁起』関連諸本における『請観音経』の受容

(1) 高野山大学図書館蔵・金剛三昧院寄託『善光寺如来講式』

本奥書に「文永九年（1272）九月 欣浄沙門了阿作」とあり、「奉模此如来為多年本尊日比慾行講会未尋得其式文依之試手自草之云」と記される。多年、善光寺如来の模刻像を本尊として礼拝していたが、講会を行おうとしても式文が入手できないので自ら執筆したという。元応2年（1320）丹後国で書写されたとの奥書がある。金剛三昧院への伝来の詳細は不明。密禅律の三宗に浄土教も兼学していた時代がある（倉田 2001, pp. 342-351、牛山 2000）。

三段構成で書かれ、「第一明仏像来朝縁起、第二讚弥陀深重弘誓、第三挙廻向発願功力」とあって、第一段が善光寺創建説話に相当する。

爾時世尊告長者言、過十万億刹之西、有無量寿仏之國、汝當向彼方、懺悔業障、於斯長者住、仏勅頌偈云、我今稽首礼聞名救厄者唯願必定来免我三毒苦、一句未終于舌上、三尊忽現于眼前、觀夫菴羅園林之枝、宝花飛兮異香紛々、タリ毘舍利城之辺、妙光照兮瑞輝赫々、タリ當時如来者、説神呪、菩薩者開薬函、故重障即除、而病者悉起、一居大病、一避而死、骸良蘇生、矣

『請観音経』と明記されていないが、「偈云」として引く「我今稽首礼」以下の偈文は同経の「願救我苦厄」以下の祈願偈を抜粋し、月蓋長者が唱えたことにしている。観音に楊枝浄水を捧げる場面は見られない。

「如来者、説神呪、菩薩者開薬函、故」は、呪を唱えるのは阿弥陀仏。観音は薬箱を開く役回りである。経の「五体投地……経十念頃」の部分は消え、「懺悔業障」となっている。

「懺悔業障」という語は『大方広仏華嚴経』（大正蔵 10）、『仏説仏名経』（大正蔵 10）等に見られる。『大方等大集経』（大正蔵 13）には「懺悔業障衆生障法障煩惱障」、『仏説観普賢菩薩行法経』（大正蔵 9）には「懺悔諸罪」とある。『国清百録』（大正蔵 46）には「請観世音懺法」が収められており、国清寺教団の懺悔行法の中で『請観音経』が受容されていたことを示すが、『摩訶止観』の流れを汲み、台密修法としてではなく、顕教の範疇で見ることができるといふ（速水 1982）。

末木（1992）によれば、懺悔滅罪の儀式は観仏經典群の成立と密接な関係にあるという。そこで、『仏説観無量寿仏経』を重視する道綽（562～645）の

『安樂集』(大正蔵 47, p. 4b)に注目すると、

即当仏去世後第四五百年。正是懺悔修福応称仏名号時者。若一念称阿弥陀仏。即能除却八十億劫生死之罪。一念既爾。況修常念即是恒懺悔人也。とある。道綽は『大集経』に基づき、その時代を仏滅後 1500 年以上経った末法の世と捉え、「懺悔し、福を修し、仏の名号を称すべき時」とする。更に称名すれば罪が除かれ、常に念ずることは常に懺悔することだという。¹⁴

また、『安樂集』(大正蔵 47, p. 19a-b)には

時有月蓋長者。為首部領病人。皆来帰仏叩頭求哀。爾時世尊起無量悲愍。告病人曰。西方有阿弥陀仏觀世音大勢至菩薩。汝等一心合掌求見。於是大衆皆従仏勸合掌求哀。爾時彼仏放大光明。觀音大勢一時俱到説大神呪。一切病苦皆悉消除。平復如故。

とある。ヴァイシャリー治病説話をまとめたに等しい体裁になっており、時代的には了阿も『安樂集』を意識していた可能性が想像できる。

『講式』第二段には、曇鸞(476-542)、善導(617-681)に言及し、観経云、光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨、又、善導解二文云、以光明名号摂化十方、但使信心求念、上惣一形、下十弁一声等、以仏願力易得往生、又、

とある。『仏説観無量寿仏経』(大正蔵 12, p. 343b)を引用し、光明と名号を重視しつつ往生を説いている。

(2) 東大寺図書館蔵『普通唱導集』¹⁵

高野辰之が東大寺図書館で発見したもので僧良季作。中巻末巻の「涅槃講表白」に「今年正安四年(1302)壬寅也」とあり、この後の擱筆を伺わせる。

良季は京都東山の観勝寺山内の池ノ坊不断光院の住持。真言密教僧であったが、本書は、唱導の対象にあらゆる身分、職業の者を想定して各種の法会・仏事が網羅され、まさしく「唱導虎の巻」となっている。序文には、唱導の際、内外典籍の蘊蓄がなく弁舌も拙劣ならば、聴聞の人々の嘲笑を誘い、欠伸や中座を促し、尊霊の穢土遠離、浄土往生は望むべくもないので、唱導の範となる書を認めたとある(村山 2006)。

信濃国 善光寺 伝起、(中略) 爾時、毘舍離大城之月蓋長者五百長者共、往詣 仏前頭面作礼白仏言、世尊此国土之人民等遇大悪病。良医之耆婆能^レ尽^ス道術^ヲ所不能救世。唯願世尊哀愍拔濟^シ玉^ヘ。世尊告長者言、去此不遠、西方有仏。号無量寿如来^ト。有二菩薩。名觀世音大勢至。汝当請彼仏二菩薩。懺悔業障。爾時長者向彼方、焼^ヲ香^ヲ散花^ヲ作礼。奉請彼仏菩薩^ヲ之時、十念之項(ママ)無量寿仏二菩薩此国土来臨、住毘舍利城門闢、放大光明照毘舍離城。皆作金色。則阿弥陀仏説神呪之法、消滅重罪、觀世音大勢至開真手之印相^ヲ常像藥箱。平復、國中病人乃至死人皆悉得生活。(中略) 縁起委細不能具述自爾以降、利益巖重瑞応烟焉者也。倩以於阿弥陀如来^ニ者、只為後生菩提、有其利盛者就其功勝如今如来驗徳者、消除重病成就願望^ニ。然則現世当生只可奉仰阿弥陀如来矣。

『講式』と同様、釈尊は「懺悔業障」を勧める。経の「五体投地……経十念頃」のうち「五体投地」「繫念数息」を削り、「焼香散華作礼」を月蓋長者の行動として描いている。

「十念之項無量寿仏二菩薩此国土来臨」から「觀世音大勢至開真手之印印常常像像藥藥相。平復、國中病人乃至死人皆悉得生活。」までの記述は、経では「経二十念頃一、（中略）俱到二此国一往二毘舍離一住二城門闢一。仏二菩薩与二諸大衆一放二大光明一。照二毘舍離一皆作二金色一。」となっている。『普通唱導集』は『講式』と比べ、経文をより多く引用してはいるが、観音に楊枝浄水を捧げる場面はない。『講式』同様、呪を唱えるのは阿弥陀仏、観音は薬箱を開く役回りを与えられている。

末尾に「只為後生菩提、有其利盛者就其功勝如今如来驗徳者、消除重病成就願望。然則現世当生只可奉仰阿弥陀如来矣。」とあるように、「後生菩提」の語と並んで現当二世の利益を期待する内容である。

(3) 称名寺蔵(金沢文庫保管)『善光寺如来事』

外題左脇に「了禅」とあり、法光房了禅手沢本とされる。奥書がなく、書写年は不明。了禅は承久3年(1221)生、文永6年(1269)から8年(1271)まで称名寺で真言密教の修法に関する書物を書写している(高橋1990, 日置1998, 倉田2001)。

爾時仏告ク長者ニ去ルコト此ヲ不遠西方ニ有ス仏一、名ク無量寿一、有菩薩一、名ク觀音一勢至一、恒ニ以テ大悲一憐愍愍レ一切ヲ、汝今向テ西方ニ中心無ク貳心凝心大清淨ヲ五体ヲ投地ニ作シ礼一、奉ラハ請シ彼ノ仏菩薩ヲ可レ除ス斯ノ病ヲ者モノナリト教給ヘリ。時ニ月蓋長者随喜渴仰シテ歸ニヘリ宅ニ、向テ西方ニ低レ頭ヲ合掌ヲ說フ四行ノ伽陀ヲ曰ク願クハ救ヒ我苦厄ヲ大悲ヲモテ覆ヒ一切ニ、普ク放チ淨光明ヲ、滅一除シタマヘ病ノ闇冥一、為ニ免レシメンカマ毒害ノ苦ルシミ煩惱及ヒ衆ノ病ヲ、必ス来ニ至シテ我所ニ、施シタマヘ我レニ大安樂ヲ、我今マ稽首シテ礼ニシ聞名救厄者ヲ、我今自歸ニ一依シタマツル世間慈悲ノ父ニ、唯願必定来タスケタマヘ我三毒ノ苦、施シ我レ今世ノ樂ヲ及与ニヘマシマセ大涅槃ヲ、如是一、月蓋長者因下抽ニ一心ヲ之精上、立下答ニフル十念ノ之声上、専ラ縮ニ一仏二尊之身量ヲ、新耀ニ紫金白毫之容輝ヲ、照ニ一臨シ月蓋之門戸ニ、映ニ徹シマシマシキ風幔之殿台ニ、当ニテ于斯ノ時ニ、彼息女者、乍ニ嘗ニ甘露之法藥ヲ、遊ニ長生之床カニ、諸人亦永ク卷キ瘴煙之病蕙ヲ、遁ニ夭死之厄ヲ。

釈尊が「五体投地」「作礼」をもって三尊に請えば病から救われると説いており、「爾時仏告長者」以下は経の「爾時世尊告長者言」以下をほぼそのまま取り込んでいる。「四行伽陀」云々は「願救我苦厄」以下の祈願偈を取り込んで訓点を施し、月蓋長者の言葉としている。「伽陀」は「偈」に同じ。下線を施した「毒害苦」は「殺害苦」の variant である(大正蔵20, p. 34 異

本注記)。「煩惱」「涅槃」は当本原本では抄物書になっている。三尊仏は十念の声に答えて姿を現し、息女は甘露之法薬を嘗めて治癒したとする。呪の効果と光明、十念を重視するが、楊枝浄水を捧げるくだりはない。

(4) 国立公文書館内閣文庫蔵『信濃国善光寺生身如来御事』¹⁶

大乘院文書の1冊『楊本御庄検注等帳』の紙背に書かれ、建武元年(1334)当時41歳であった延命丸、出家後「実円」と名乗った者が書写したという。

異本として応永9年(1402)の書写奥書がある慶應義塾大学図書館蔵『善光寺本懐』、寛正5年(1464)の書写奥書を有する西本願寺蔵『善光寺如来本懐』、上巻のみの零本で表紙に「善光寺如来本懐上巻」、内題に「信濃国生身如来御事」とある岡崎市満性寺蔵本、書写原本不明の「大日本仏教全書120」所収『善光寺の縁起』があるが、これらより古い写本である。

コノ仏菩薩ヲ請タテマツテ、汝カ女ノ疫病ヲハ、タチマチニ懺悔セヨトノ給ヘハ、(中略)仏ノタマハク、汝カ城ニカヘリテ、沐浴清浄ニシテ、西ノヒサシニ文机ヲカマエ、花ヲ散シ、香ヲタキ、西方ムカイテ、念セヨ、トノタマウ。長者ヨロコテ、城ニカヘテ、花ヲ散シ、香ヲタキ、高シヤウ念仏ヲ申ス。イマタ十念満セサルヲ、十万億ノ仏土ヲスキテマシマス阿弥陀仏ハ、六十万億那由他恒河沙由旬ノ御身量ヲ、一尺五寸ニツメ、一光三尊トアラハレタマウ。毘舍離国ニ来臨シ、長者ノ門ニ住セシムル。大光ヲハナチマシマス。城ハ金色トナル。長者ノマトワアキラカナリ。イヨ／＼念仏ヲ申。如来ハ、コノ文ヲアラハス、光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨。文ノ心ハ、門々不同八万四、為滅無明果業因、利劍即是弥陀尊、一声称念罪皆除、コノ利劍、疫病ノ神ヲハラウ。如来、又甚深ノ法ヲトキテ、衆生ノ疫病ヲカロシメ給。

ここでは「懺悔業障」でなく「疫病ヲ」「懺悔セヨ」となっており、月蓋長者が「散華焼香」「高声念仏」を始めたところ、直ちに三尊仏が出現したという展開である。楊枝浄水を捧げる場面はない。

「光明遍照十方世界 念仏衆生攝取不捨」は前述の『仏説観無量寿仏経』から引用し、阿弥陀仏の言とする。「門々不同八万四」以下は善導の『依観経等明般舟三昧行道往生讚(般舟讚)』(大正蔵47, p. 448c)の一節。「門々不同八万四 為滅無明果業因 利劍即是弥陀号 一声称念罪皆除」とあるのを取り込んで「利劍、疫病ノ神ヲハラウ」として利劍=弥陀名号が疫病神を払うとしている。言うまでもなく浄土教的色彩が濃い。

(5) 高野山増福院旧蔵(高野山大学図書館蔵)『善光寺縁起』

内題は「善光寺如来御縁記」。付箋に「文明十五癸卯三月十五日／為結縁書之了」とある。文明15年(1483)書写ということになり、現存真名本縁起の中では最も古い写本と考える(倉田2001)。

向彼ノ方ニ懺悔シ罪障ヲ、称念シテ名号ヲ、当ニ請ヒ彼仏菩薩ヲ、始女ノ如是ヨリ、国中ノ人民ノ病患悉可消滅ニ云云。于時月蓋長者聴聞シテ此教ニ、帰私宅ニ。歎喜無極ニ、即向ニ西方ニ備香花燈明ノ諸ノ供具ヲ、頭面作礼ヲ

唱四行伽陀_ヲ。願救我苦厄大慈願一切
善哉淨光明滅除障礙冥南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏ト令_レ稱_ニ十念_ヲ、于
時西方極樂世界ノ阿彌陀如来知食_シ月蓋之所念_ヲ、応_シ十念声_ニ、促_メ六
十萬億那由他恒河沙由旬相好_ヲ、示_ス一尺五寸ノ聖容_ヲ、左ノ御手_ニハ結_ヒ
刀劔ノ印_ヲ、右ノ御手_ニハ作施無畏ノ印_ヲ、須臾之間_ニ現_シ月蓋長者ノ西ノ楼
門_ニ、放_{ツテ}十二ノ大光_ヲ照_ニタマフニ毘舍離城_ヲ、皆變_シ金色界道_ト、山
河石壁更無_シ所障碍_{スル}、彼ノ彌陀ノ光明ハ余仏ノ光明ノ所不能及_ヲ、何況
於_テ天魔鬼神_ニ。故諸ノ行疫神当_テ此光明_ニ如_ク毒ノ箭ノ入_カ胸_ニ、身心
熱惱_{シテ}而方々_ニ逃_レ去_ル。而阿彌陀仏説_テ大神呪_ヲ。消伏毒害陀羅尼敬奉彌陀
。彌陀六字章句陀羅尼ナリ消滅_シ重罪_ヲ、
觀世音大勢至応同_{シテ}本師ノ化身_ニ、促_{シテ}広長ノ身量_ヲ、現_{一尺五寸}形体_ヲ、
二菩薩同_ク結_{タマフ}般若梵篋ノ印_ヲ、定恵ノ掌ノ中_ニ納_テ真珠ノ葉ノ箱_ヲ、
侍立_ス本師如来ノ_右塗_テ藥於楊柳之枝_ニ灑_{タマフ}國中ノ病人_ニ。然間如是
御前_ハ耆婆_カ良藥_モ無効驗_ニ、陰陽ノ法身_モ無_ク冥助_ニ、忽_ニ為_シトスル命終_ニ之
処_ニ、蒙_テ彌陀光触_ヲ六根如元_ニ平覆_シ、嘗_テ觀音勢至ノ良藥_ヲ身心安樂_ナ
リ。相好具足_{シテ}其形殆_ト超過_{セリ}古_ニ。(卷一 14 丁裏-15 丁表)

釈尊による「懺悔罪障」「称念名号」の教えを受け、月蓋は西方に向かって香花燈明諸供具を備え、頭面作礼する。「四行伽陀」即ち祈願偈を唱えた上で、「南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏」と十念を称える描写になっている。

善光寺如来像の中尊阿彌陀如来の印相が説明され、左手は下ろして掌を前に向け、第二指と三指のみ延ばしてその他は曲げる「刀劔印」。右手は臂から先を上を上げて掌を前に向ける、いわゆる「施無畏印」である。

「彼彌陀光明諸行疫神当此光如毒箭入胸、身心熱惱而方々逃去」は、阿彌陀仏の光明により疫病神が退散する様を描写する。続いて、阿彌陀仏が大神呪を説き、般若梵篋印の觀音・勢至は、真珠葉箱を手阿彌陀仏の脇にいて、楊柳枝をもって薬を注ぐ。月蓋の息女、如是姫も阿彌陀仏の光触を浴び、二菩薩の良薬を口にす。これにより、一同、元のように回復したという。

楊枝浄水を觀音に捧げるのではなく、觀音と勢至が楊柳枝を用いて薬を降り注ぐという描写になっている。

(6) 鎌倉英勝寺蔵 (鎌倉国宝館保管) 『善光寺縁起絵巻』

鎌倉英勝寺は徳川家康の側室英勝院所縁の浄土宗寺院。ここに伝わる絵巻で、江戸時代初期のものである。阿彌陀仏が単独で描かれ、脇侍が登場しない、異例の形式になっている(倉田 2003)。

くわつかいいそきかへりて、にしのろうもんをとりのけて、つくゑをたてならへて、かうをたき、はなをそなへて、によせをかきおこして、たまのかさをせさせて、にしのかたへむけ、けんとなのはゝ、むかしはねんふつ申といふ事もなし。わか身をほとけと思なしてありしか、むすめのおはらんとするときをいたりて、おなしくにしにむかひて、おやこ三人、こゝろをひとつになして、ねんふつを申。そのほかはんみんにいたるまで、ねんふつをそ申ける。さるほとに、さいほうより、あみたふつつのまにかきたりたまひけむ。

くわつかいかまとのまへにて、十方せかいへひかりをはなたまへは、このひかりまゑんの身に、つるきのたつかことくにおほえて、きりさくかことくに、せめられまいらせて、たちこらへすして、によせをうちすてゝ、ところをさりぬ。

「かうをたき、はなをそなへて」は経の「焼香散華」を仮名書きにした体裁。「にしにむかひて、おやこ三人、こゝろをひとつになして、ねんふつを申」云々とあって、念仏をもって阿弥陀仏の出現を促す。「このひかりまゑんの身に、つるきのたつかことくに」とあるのは、『信濃国善光寺生身如来御事』における「コノ利劍、疫病ノ神ヲハラウ」と同趣旨で光明を強調している。密教的要素は消え、浄土教的性格が強く現れている。

(7) 青蓮院蔵『請観音経法』表紙見返し「楊枝供水事」

京都青蓮院に『請観音経法』と題する写本が二本存し、ともに表紙裏に次のことが書かれている。うち一本の本奥書に「建長七年（1255）」とある¹⁷。

楊枝供水事

善光寺伝云、昔、如来在_レ世毘舍利城有_二五種病_一。又病人不_レ過_二七日_一、病及_二月蓋長者家_一、長者有_レ女。名_二如是_一也。既受_二此病_一。長者白_レ仏、仏教今弥陀ノ三尊、忽_レ顯_二毘舍離城ノ門闥_一。観音乞テ浄水以楊枝ノ枝、灑之、長者女及一国病皆癒等云々。

「請観音法」の手順を詳細に記したテキストの表紙裏に善光寺創建説話の一部が記載されている。「五種の病」は疫病の流行を示し、月蓋長者の息女「如是姫」にも言及する。楊枝を以て浄水を注ぐ内容で、この修法と善光寺創建説話の結びつきを示すものとなっているが、類例は管見に及んでいない。

(8) 諸本における『請観音経』受容の特徴

『請観音経』の治病説話は根本説一切有部を成立基盤にしているという（大塚 2008, 岡田 1987, 松田 2002）。そこで、『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻第五（大正蔵 24, 19c-29a）を見ると、釈尊が阿難をヴァイシャーリー門闥に送り、偈と呪を唱えさせる筋立てになっている。『請観音経』は仏説經典の体裁を取りつつ、治病という利益を保障する主体を阿弥陀三尊に入れ替え、その内の観音を中心とするのである。

上述のように、『請観音経』は観音の名号と呪の功德を強調しているが、爾_レ時世尊憐_二愍_一衆生_一覆_二護一切_一。重請_二観世音菩薩_一。説_二消伏毒害陀羅尼呪_一。（大正蔵 20, p. 35a）

とあって、釈尊は疫病救済のために呪を説いた観音に向かい、重ねて衆生救護のために呪を説くよう要請している。呪の威力は観音に帰せられているのである。また、経の他の部分でも「一心称名観世音菩薩名号。三誦此呪云々」といった表現が繰り返され、名号を称えることと呪の功德を重ねる形式が基本となっているが、祈願の対象はあくまでも観音である。

ところが、『講式』と『普通唱導集』を見ると、呪は阿弥陀仏に帰せられ、

『善光寺生身如来御事』でも観音は脇役に回っている。諸本とも光明を重視し、真名本と『縁起絵巻』では光明が疫病神を退散させるという描写である。

『善光寺生身如来御事』は「高声念仏」「名号の利剣」を説き、『縁起絵巻』は特に「念仏」を強調する。更に『縁起絵巻』には阿弥陀仏が出現、光明が魔縁を突き刺すくだりがあり、浄土教的色彩で描かれている。

一方、楊枝浄水を観音に捧げるという記述は諸本に見られず、観音は『講式』、『普通唱導集』、『善光寺如来事』では薬を用意する役割であり、真名本では勢至とともに楊柳枝で薬を注ぐ描写になっている。

「楊枝浄水法」即ち「請観音法」が治病の修法として整備されたのは11世紀、池上阿闍梨皇慶のもとであり、『四十帖決』(大正蔵75, p. 878b)には、
請観音経法^レ以阿弥陀^ノ三尊^ヲ懸^テ安置^ス之^ヲ。而以聖観音^ヲ為本尊^ト修^ス護摩^ヲ。其供養法多分依^テ蘇悉地^ニ修^{スル}之^ヲ耳。番僧読経。又誦^ス経^ノ中六字章句陀羅尼^ト消伏毒害陀羅尼^ニ呪^フ。件二呪隨筆隨時隨一用之阿闍梨念誦^ト并^ニ護摩^トニ^ハ用阿魯力迦明^ヲ。又根本印明^ニ用阿魯力迦^ノ印明^ヲ。蓮花部心也。又毎^ニ時設浄楊枝二枝^ヲ如世人所用楊枝安脇机^ニ。其楊枝前後献^ル闍伽^ヲ之時。各取一枝^ヲ打渡^シ闍伽器之上^ニ献^ス之。

とある。楊枝二枝を脇机に安置し、闍伽即ち浄水を本尊に献ずるといふ。楊枝は「如世人所用楊枝」とあるとおりに、歯木にはかならない。修法としての「請観音法」では、経の本旨に沿って観音に楊枝浄水を捧げるのである。

台密諸流の口伝を集大成した承澄(1205-1282)の『阿婆縛抄』¹⁸は、「為^レ除^レ疫癘^ニ修^レ之」として、「疫病除滅」が目的であることを明示するが、先蹤として「保元元年夏天下疫癘人民死亡。為^レ払^レ彼難^ニ於^レ穴太房^ニ令^レ常師修^レ之。」と記す。平安末期になってからの初例ということになる。また、

習伝之人甚希也。此経旧訳故、行法儀則不^レ慥。仍以^レ口伝^ニ伝^レ之。

とも記しているが、これによれば、速水(1982)が言うように修法としての伝統は浅く、それほど目立つものであったとは考えられない。

次に、『請観音経』の治病説話以外の部分を見てみると

一心称^レ観世音菩薩^ニ誦^レ持此呪^ニ。現身得^レ見^レ観音菩薩^ニ。一切善願皆得^レ成就^ニ。後生^ニ仏前^ニ長与^レ苦別。(大正蔵20, p. 35c)

如^レ此菩薩及是神呪畢定吉祥。常能消^レ伏一切毒害^ニ真実不^レ虚。普施^ニ三界一切衆生^ニ令^レ無^レ怖畏^ニ。作^レ大擁護^ニ今世受^レ楽。後世生处見^レ仏聞^レ法速得^レ解脱^ニ。(p. 36a)

得^レ聞^レ此経首題名字^ニ。常得^レ見^レ仏及諸菩薩^ニ。具^ニ足善根^ニ生^ニ浄仏国^ニ。(p. 38a)

等とあって、「後生仏前」「後世生处見仏聞法」「生浄仏国」等の言葉から観音の称名や呪、経の聴聞の利益として浄土往生を約束する意図が伺える。

なお、本願寺三世覚如の長男である存覚(1290-1373)の『持名鈔』¹⁹には、『請観音経』の治病説話を提示した上で、「これはただ念仏の利益の現当かねたることをあらはすなり……稲を得る者は必ず藁を得るがごとくに、後世をねがへば現世ののぞみもかなふなり。」とある。『請観音経』自体が現当二世の利益を説くと解釈しているのである。

結局、善光寺創建説話においては、修法による治病効果より懺悔と呪の効果期待され、光明と名号が強調されていると言えよう。諸本とも『請観音経』を換骨奪胎した形で記述され、現世利益を謳いつつ浄土への志向が埋め込まれていることに気づく。

まとめ

小稿で確認した諸本は、時代的には源信(942-1017)や法然(1133-1212)が念仏の利益、専修念仏を説くなど、浄土信仰が確立された後のものである。内容的にも浄土教的色彩が濃い、それでもなお『請観音経』を重視する傾向は失われていない。これは逆に『請観音経』自体に密教的要素とともに浄土教的要素も含まれていたことが前提になっていたからではなかろうか。

三崎(1988)によれば、源信の『横川首楞嚴院二十五三昧式』(大正蔵 84)は『請観音経』に基づきながら密教的な要素を取り去って阿弥陀仏を中心とした浄土教の三昧式に作りかえているという。更に、法照(?-777頃)の『浄土五会念仏略法事儀讃』(大正蔵 47)中の「請観音讃」には呪も引かれているが、全体的に密教的要素はほとんどないという。

これらのことから考えると、善光寺創建説話は本質的に『請観音経』だけでも組み立てが可能ということになる。因みに増福院旧蔵本『善光寺縁起』には表紙裏に

此御縁記読之時者、必々先阿弥陀経一卷訓^レ可読之^一。旧来之掟也。云云とある。まず『阿弥陀経』を読むべきだというのは逆説的な戒めではないか。

次に、上原(1991)、大西(2002)等の研究において、善光寺如来に類似の像として韓国黄海道谷山郡花村面蓬山里出土の一光三尊像が注目されている。背面の銘文には「景四年在辛卯、比丘道口、共諸善知識那婁賤奴、阿王、阿据五人、共造無量寿像一軀、願亡師父母、生生心中常知遇弥勤、所願如是、願共生一处、見仏聞法」とある。「景四年辛卯」は571年に比定され、「願亡師父母」は追善の造像であることを物語る。「無量寿」仏と明記され、6世紀後半より前から半島に阿弥陀信仰のあったことが確認できる。

善光寺如来像の脇侍の二菩薩の印相は一般に「梵篋印」と呼ばれているが、本来は宝珠を両掌中に包みこんだ宝珠捧持形ではなかったかという指摘があり(金 1990, 大西 2002)、宝珠捧持形菩薩像は6世紀後半頃を中心に百済で流行したものだという。大西(2002)は、6世紀中頃以降に作られた百済菩薩の中に宝珠捧持形菩薩の立像が一光三尊仏の脇侍として登場することに触れ、この菩薩が舍利供養菩薩の性格を有する初期観音菩薩から派生した一形態であり、そうした菩薩を脇侍とする一光三尊仏立像は、百済における『請観音経』の流布及びそれに依拠する無量寿三尊仏の現れではないかとする。

以上を総合すると、善光寺如来像は朝鮮半島におけるこうした環境の中で造られた仏像ということになる。『請観音経』に基づく造像形式としての三尊仏であったからこそ、舶載時から『請観音経』とセットになっており、善光寺創建説話も必然的に『請観音経』と相即不離の関係になるものと考えたい。

注

¹『延慶本平家物語』古典研究会,1964。『平家物語 長門本』国書刊行会,1906(名著刊行会,1974再刊)。

²『新訂増補国史大系 吾妻鏡』第一,吉川弘文館,1932(但し1968刊普及版)、文治三年七月二七日条,pp. 266-267。

³県立長野図書館蔵『大塔物語』9丁表。

⁴後述の文明14年写本高野山増福院旧蔵『善光寺縁起』(倉田2001)。訓点は原本尊重。

⁵長元三年五月二十三日太政官符(国史大系『類聚符宣抄』卷三所収)。

⁶嘉保元年(1094)11月23日-12月15日,長治2年(1105)3月12日-4月23日,8月6日、嘉承元年(1106)2月17日から3日間。『中右記』『殿暦』等の該当日条(吉原,1998)。

⁷『原装影印版古辞書叢刊 伊呂波字類抄 十卷本』,雄松堂出版,1977。

⁸『新訂増補国史大系 扶桑略記』(真福寺蔵本)欽明天皇十三年条。

『覚禅鈔』(大日本仏教全書53、図像部3、1971、p. 80)、『阿婆縛抄』所収『諸寺略記上』(大日本仏教全書60、図像部10、1971、p. 264)、『鷲珠鈔』(「真言宗全集」36、1934、pp. 204-205)にほぼ同文あり(倉田1991)。

⁹『塵添壙囊鈔』巻第15-20(仏書刊行会、1912)に「一搦手半ト者。一尺三寸也。母肘ノ節ヨリ。其ノ節ニ至ル也。或ハ、一尺二寸共云。一搦手ハ八寸。半ハ四寸也。人ノ在_レ母胎_レ時。第二十ノ七日至テ人相皆備ハリ。以_レ手推_レ面ヲ蹲踞シテ坐ス。其ノ時ノ身ノ長ケ母ノ一搦手半ト斎等也ト云々。」とある。

¹⁰『新訂増補国史大系 水鏡』21、pp. 35-36。

¹¹「縁記」の書名を持つものが中野猛『略縁起集成』第1巻-6巻(勉誠社1996-2001)に多数収録されている。

¹²支謙訳『仏説維摩詰経』、鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』、玄奘訳『説無垢称経』の三本がある(大正蔵14)。

¹³『梵文維摩経-ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂』大正大学出版会,2006。

¹⁴藤堂恭俊/牧田諦亮『曇鸞・道綽(浄土仏教の思想 第四巻)』講談社,1995), pp. 301-303。

¹⁵高野辰之『古文学踏査』大岡山書店,1934。村山(2006)、pp. 100-101。

¹⁶『改訂内閣文庫国書分類目録 上』(昭49、p. 224)に「楊本御庄檢注等帳(紙背信濃国善光寺生身如来御事)建武元写」とある(牛山1997、倉田2001)。

¹⁷吉水蔵聖教調査団『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』汲古書院,1999。倉田(2001)、pp. 575-576。

¹⁸『大日本仏教全書第93巻 阿婆縛抄』巻第84,講談社,1972, p. 231。

¹⁹『浄土真宗聖典(註釈版)』第16刷,1996。

略号

大正蔵：大正新脩大蔵経

例 大正蔵 20, pp. 34c-38a は『大正新脩大蔵経』第20巻 34頁下段~38頁上段。

参考文献

石田茂作(1971)：「善光寺如来は阿弥陀仏にあらず」(一志茂樹先生喜寿記念会編『一志茂樹博士喜寿記念論集』郷土資料編纂会)。

上原昭一(1991)：「善光寺信仰と仏教美術」『善光寺 心とかたち』第一法規。

牛山佳幸(1997)：「『善光寺縁起』の成長」『長野市立博物館特別展図録 古代・中世人の祈り-善光寺信仰と北信濃-』長野市立博物館。

同上(2000)：「高野山大学図書館架蔵『善光寺如来講式』について」『市誌研究ながの』第7号。

江口正尊(1985)：「善光寺仏試考」『東日本学園教養部論集』11。

岡田真美子(1987)：「梵文薬事欠損箇所の部分補填ーヴァイシャーリー疫病伝説ー」『高崎直道博士還暦記念論集：インド学仏教学論集』春秋社。

大塚伸夫(2008)：「請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経」における初期密教の特徴ーヴァイシャーリーー治病説話を中心としてー」『高野山大学密教文化研究所紀要』21号。

大西修也(2002)：『日韓古代彫刻史論』中国書店。（「宝珠棒持形」の初出は「宝珠棒持形菩薩の成立過程とその思想的背景について」『東洋美術史論叢』雄山閣,1999）

金理那(1990)：「宝珠捧持菩薩の系譜」『日本美術全集第2巻 法隆寺から薬師寺へ 飛鳥・奈良の建築・彫刻』講談社, pp. 195-200。

倉田文作(1964)：「善光寺如来考」『国華』866、1964-5。

倉田治夫・倉田邦雄(1991)：「善光寺縁起研究（1）「善光寺縁起」の諸本と月蓋説話（序説）」『説話』9。

倉田邦雄・倉田治夫(2001)：『善光寺縁起集成（1）寛文八年版本』龍鳳書房。

同上(2003)：『善光寺縁起集成（別巻）善光寺縁起絵巻一鎌倉英勝寺蔵せんくはうしゑんき』龍鳳書房。

黒坂周平(1990)：「善光寺草創考一試論一」『信濃の歴史と文化の研究』1、黒坂周平先生の喜寿を祝う会編。

小林敏男(1996, 98, 99, 2000)：「善光寺草創事情(1)～(4)研究史概観」『大東文化大学紀要』人文科学 34, 36, 37, 38/1996、98、99、2000。

小林計一郎(2000)：『善光寺史研究』信濃毎日新聞社。

五来重(1988)：『善光寺参り』平凡社。

坂井衡平(1969)：『善光寺史』上・下、東京美術。

末木(1992)：末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経（浄土仏教の思想 第二巻）』講談社, p. 146。

佐和隆研(1977)：密教美術論, 便利堂, p. 149。

田島公(2000)：「『伊呂波字類抄』の「善光寺」縁起と若麻績氏」『長野市誌』第二巻 歴史編 原始・古代・中世。

同上(2005)：「「東人の荷前」（『東国の調』）と「科野屯倉」一十巻本『伊呂波字類抄』所引「善光寺古縁起」の再検討を通してー」（吉村武彦編『律令制国家と古代社会の研究』稿書房。

田中徳定(1992)：「『扶桑略記』撰者の性格についてー引用仏教書の側面からー」『駒澤國文』29、1992-02、23-33。

高橋秀栄(1990)：「法光房了禅について」『金澤文庫研究』284, pp. 45-53)。

中野猛(1995)：『説話と縁起』（新典社研究叢書 80）、新典社。

速水侑(1970)：『観音信仰』塙書房。

同(1982)：「三十三間堂の楊枝浄水供」『民衆宗教史叢書 第七巻 観音信仰』, 雄山閣。

日置孝彦(1998)：「金澤文庫保管『善光寺如来事』について」『金澤文庫研究』

300, 1998-3, pp. 38-49。

平田俊春(1956):「扶桑略記の研究」『立正大学文学部論叢』5、1956-02、pp. 3-84。

堀越光信(1984):「『扶桑略記』撰者考」『皇学館論叢』17(6)、1984.12、pp. 23～56。

同上(1985):「『扶桑略記』の成立年代と編纂目的」『皇学館論叢』18(2)、1985.4、pp.30～46。

松田祐子(2002):「ヴァイシャーリー疫病譚における傘蓋供養」『日本仏教学会年報』67号。

三崎良周(1988):『台密の研究』創文社。

峰岸明(1984):「字類抄の系譜－人事・辞字両部所収語の検討を通して－」(上・中・下)『国語国文』53-9～11号。

村山修一(2006):村山修一編『翻刻・解説 普通唱導集』法蔵館。pp. 100-101, 182。

八木春生(1992):「中国南北朝時代における摩尼宝珠の表現の諸相 再論」『佛教藝術』203号、1992-7。

吉原浩人(1998):「『善光寺縁起』生成の背景」『国文学解釈と鑑賞』63-12, 1998-12。

米山一政(1957):「善光寺古縁起について」『信濃』9-6、1957-6。

(テレビ信州 常務取締役)

信州大学 人文学部 非常勤講師)

2011年1月11日受理 2011年2月7日採録決定